

聴講した学生からの感想

先輩ロールモデルからの期待

医学部2年 榎澤 もゆる

埼玉医科大学研究の日の研究発表を聞いて最も印象に残ったのは、医学部三年、安藤優希枝さんの「細胞死を免れた老化様腫瘍細胞は免疫原性を有するか」という発表です。この発表が印象に残った理由は二つあります。

一つ目の理由は、自らの研究を楽しんでやっているということがよく伝わってきたからです。自分で研究テーマを決めて、思い通りのデータが得られる、あるいはそうでなくても新たな発見や疑問が得られるというのは楽しいと同時に日々の勉強にも刺激を与えてくれることなのだろうなと感じました。また、研究を行ったきっかけやどんな疑問を持ってその疑問を解決するためにどのような解析を行ったのが非常に明確だったため、一番興味関心を持って発表を聞くことができたと思います。

二つ目の理由は、発表者の安藤さんとお話したことがあり、先輩の新たな一面を知ることができたような気持ちになったからです。私が課外学習プログラムの春季語学研修に参加した時に安藤さんも参加されていたのですが、今回研究発表をされているのを見て、課外学習プログラムを積極的に活用して色々なことに取り組まれていることを知りました。私も何か集中して取り組めるようなことを見つけてもっと有意義な大学生活を送れるように努力する必要がありますなと感じました。

最後に、研究発表を聞くということ自体私にとってはほぼ初めての経験でしたが、今回一つ、二つ上の学年の先輩方の発表を聞いて「研究」というものが少し身近に感じられるような気がしました。また、私が日々学んでいる医学は全ての研究者の日々の研究によって得られた結果であることを改めて感じる事ができたと思います。

新しいことに挑戦するきっかけ

医学部2年 宗和 峻平

私は研究発表の中でも第一部の学部学生研究による研究発表会が非常に印象に残った。学生部門での先輩たちの発表は、とにかく圧巻だった。習ったこともない自分で研究して考えたことを発表することは難しいことだと思うが堂々としていてかっこいいと思った。二年生の2学期まで学んだ内容も多く含んでおり、聴きやすい部分もあった。そのため、発表内容には難しい内容が多くあったが楽しみながら聞くことができた。

自分で学んだ内容や、経験した状況の中で気になったことからまだ誰も研究発表していないようなことを研究しよ

うと考える意欲が本当に尊敬できると思った。予想や期待はあったとしてもどのような結果が起こるかやってみないとわからないことをするのはすごいと思う。自分と同年代にこんなにすごいことをしている人がいるというのは本当によい刺激をもらえた。

今後、授業や日常生活において発生した疑問は研究まではできずとも自分で調べてみようと思った。そう思わせてもらえるような非常によい発表だった。

「好きなところに行って気になることを掘り下げる(立花隆)」この言葉は非常に心に残った。学生のうちに一つにこだわるのもよいことだが、様々なことをみて、様々なことに関心を持ち、広い視野を持って生活していきたいと思った。

目の前の結果から考え抜くことが大切

医学部2年 畑澤 さら

私は、視聴した発表の中で安藤先輩のものが最も印象に残った。私自身今年の4月から微生物学教室で実験を行っており、安藤先輩の実験の様子も何度も見学させて頂いた。それらの実験結果がどのように考察され、発表に組み込まれているのかを今回見る事ができ、非常に勉強になった。また、半年ほど研究室に通ったことで、ひとつひとつの結果のどこに着目して次の実験の方向性を決めるのかを考えることは研究の醍醐味であると同時に、最も難しいポイントのひとつであるということを実感した。そのため、10分にも及ぶ発表をスムーズに出来るまで様々な実験を行い、結果をまとめられるということに感銘を受けた。

私は、結果から考察したり次のアイデアを考えたりすることの楽しさを最近知った。しかし、まだ知識が浅くわからないことも多くあるため、これからも先生に質問したり勉強会に参加したりすることで様々なことを吸収し、研究をもっと豊かなものにして先輩のような発表が行えるように成長していきたいと思う。また、研究では様々な角度から物事を考える思考力が必要であり、これは患者ひとりひとりに合った治療を提供することに役立つと考える。よって、研究で知識や考え方を養い、それを活かせるような医師になりたい。

身近な経験から課題を深掘りする

医学部2年 山本 隆史

最も印象に残った発表は、医学部3年松島和希さんの「パーキンソン病関連遺伝子の主要時計遺伝子発言リズムへの影響の解明」である。

発表者の松島さんの祖母がパーキンソン病を発症し、時間感覚の欠如が見られたことから、パーキンソン病と概日リズムの関連について研究を行っていた。概日リズムは、2年の情報系で学習したばかりであり、研究内容が学習した内容と深く関わりがあったため、最も印象に残った。研究発表では、2年生までに学習した内容（遺伝子発現、細胞の蛍光、ベクターの使用など）が数多く用いられており、これまで学習した知識で研究を行える段階にあることに気づかされた。

また、医学部で学ぶことは、臨床で用いる知識が多く、埼玉医科大学でも臨床の道に進む生徒が多いが、今回の発

表を視聴して、医学部に在籍して学習する目的は臨床のためだけでなく、研究をするための知識を学んでいる側面もあると思った。

発表会の冒頭で、村越先生は、研究がいかに面白いかということについて言及されていた。自分自身がずっと研究してきた結果から、研究内容と格闘し、新たな道を模索するという姿勢がさらに研究に没頭する要因になるという話だった。今まで医学部で行ってきた実験（実習）はすでに結果が分かっていることを理解するための実験が多かったが、未知の領域に対する研究も興味深いと感じた。